

# 韋応物の「窓」の表現について

山田 和 大

はじめに

韋応物は唐代の自然詩人として有名である。しかし、韋応物の自然詩の特徴は、たとえば「幽」や「清」の字が多用されることが明らかに becoming いたものの、王維や孟浩然、柳宗元と比べ、その特徴が十分に解明されているとは言いがたいように思われる。<sup>1)</sup>

筆者は先に、韋応物詩の「賞」字の使われ方に着目し、韋応物の自然詩の特徴を考えた。その際、清の番億の『劍谿説詩』又編に「詩中有畫、不若詩中有人。左司高於右丞以此。」(詩中に画有るは、詩中に人有るに若かず。左司の右丞より高きは此を以てなり。)とあるのを参考に、韋応物が自然を詠むときにはその自然美とともに愛でる友人を同時に詠み込む傾向にあることを指摘した。<sup>2)</sup> また、それを受けて、韋応物の植物詩について検討し、韋応物が植物を友として見ているということを明らかにした。<sup>3)</sup> こうした考察を通して気になったことがある。それは、韋応物が植物を友として詠むときに、役所など、官吏の世界にあるものを詠むことが多く見られることである。

役所の中で植物のような自然物を愛でるといふ行為には、吏隠意識が含まれていると考えられる。こうした吏隠意識を捉えていくとき、官と隠との境にあるものについて考察することは重要だと思う。

本稿では、官の場である役所の室内と、隠の象徴である植物がある庭や山林との境界にあるアイテムである「窓」に着目してみたい。「窓」の表現に関しては、謝朓、白居易についての先行研究がすでにある。謝朓も、白居易も、韋応物の文学史的な位置づけを考えると、避けては通れない人物である。そこでまず、謝朓の「窓」の表現を先行研究を踏まえて整理し、その上で韋応物の「窓」の表現について見ていきたい。そして、王維・孟浩然の「窓」の表現との比較を通して、韋応物詩の表現の特徴について考察していく。さらに、白居易の「窓」の表現への展開を先行研究を踏まえて、考えてみたい。<sup>4)</sup>

## 一 謝朓の「窓」表現

韋応物に先行する詩人のうち、謝朓の詩には「窓」を詠み込んだ特徴的な表現が見られるという。石碩氏によ

れば、謝朓以前の六朝詩の「窓」の表現を探っていくと、

① 建築の一部としての窓を描寫する。

② まどから室内に差し込む（吹き込む）光・風を描寫する。

③ 閨室の窓を描寫し、女性を連想させる。

④ 窓を通して見える近景を描寫する。

⑤ 窓を通して見える中景・遠景を描寫する。

の五類型が見られるという。これを踏まえ、石氏は、謝朓の詩を検討しておられる。「冬日晚郡事隙」（卷三）、「後齋迴望」（卷三）については、「近景・遠景とともに配置し、望郷の念、隱遁への思いなどを導き出している。」と述べ、「郡内高齋閑望答呂法曹」（卷三）については「作者の視線が窓外の世界に巡らされたまま、室内、すなわち官舎の中に戻ることはない、という特徴がある。」と指摘する。

これらをもとに、謝朓の「窓」の詩の特徴として、

① 遠景とともに近景・中景を配置したこと

② 作者が意識的に窓外へ視線を向けたことよって立體的な描寫が實現され、隱遁・望郷・惜別など、窓外の遠景に付随して様々な感情が詠じられたこと

の二点をまとめておられる。それを承けて、遠景を描寫

した理由として、

① 叙情に先だって窓外の風景が描寫されていること、  
② 官舎の中では實現し得ない願望が詠じられていること、の二点である。……

「窓」は室外の風景を媒介するばかりでなく、同時に現實の世界（官舎の中）から自己の内面の世界へと詩人の意識を轉換させる裝置でもあるのだ。謝朓詩における「窓」表現はこのように、風景の描寫と叙情の導入という二重の役割を果たしているのである。

と指摘されている。<sup>(5)</sup>

では、謝朓はなぜ「窓」というアイテムを風景を詠む中で使ったのであろうか。まず、石氏も挙げておられるもののうち、二首を取り上げてみたい。

- |   |       |             |
|---|-------|-------------|
| 1 | 案牘時間暇 | 案牘時に間暇にして   |
| 2 | 偶坐觀井木 | 偶たま坐して井木を觀る |
| 3 | 颯颯滿池荷 | 颯颯として池の荷に滿ち |
| 4 | 脩脩蔭窗竹 | 脩脩として窗の竹を蔭ふ |
| 5 | 簷隙自周流 | 簷隙自から周流し    |
| 6 | 房櫳閑且肅 | 房櫳閑にして且つ肅たり |
| 7 | 蒼翠望寒山 | 蒼翠寒山を望み     |
| 8 | 崢嶸瞰平陸 | 崢嶸平陸を瞰む     |
| 9 | 已惕慕歸心 | 已に慕歸の心を惕へしめ |

10 復傷千里目 復た千里の目を傷ましむ

…… (冬日晚郡事隙「巻三」)

仕事の合間に窓の前の池のハスや竹、その背後に山や平野を望む。窓をフレームにして外の風景を見ることが、望郷の念が沸き起こってきたというものである。窓枠の中に近景と遠景がともに配置されることで立体感が出てくる。

また、「郡内高齋閑望答呂法曹」(巻三)には、

……

3 窗中列遠岫 窗中 遠岫を列ね

4 庭際俯喬林 庭際 喬林を俯す

……

とある。森野繁夫氏は、第3句の注に謝靈運「田南樹園激流植援」(『文選』巻三十)の「群木既羅戸、衆山亦對牕」(群木既に戸に羅り、衆山も亦 牕に對す。)とあるのを引いた上で、「謝朓は、靈運の此の句を参考にして、窓の中に山なみが連なっていると、窓を額縁のように見立てた表現にしている。表現せんとする対象物の間に別の物を置くことによって、立体感が出るのをねらったのである。」と述べておられる。

ここで、石氏の言う、「隱遁・望郷・惜別など、窓外の遠景に付随して様々な感情が詠じられたこと」というこ

とについて確認したい。ここに挙げられた感情は、特別に「窓」を詩の中に使わなければ詠えないというわけでもない。たとえば、「休沐重還丹陽道中」(巻三)には、

……

7 汀葭稍靡靡 汀葭は稍靡靡たり

8 江蒹復依依 江蒹は復た依依たり

9 田鵠遠相叫 田鵠 遠く相叫び

10 沙鴝忽爭飛 沙鴝 忽ち争ひて飛ぶ

11 雲端楚山見 雲端に楚山見え

12 林表吳岫微 林表に吳岫微かなり

13 試與征徒望 試みに征徒と与に望めば

14 鄉淚盡沾衣 鄉淚 尽く衣を沾す

……

とある。望郷の念を詠むという点では、「窓」を通して風景を詠む詩と変わりはない。ただ、本詩を読むと、水辺の草、飛んでいく鶴やがん、山にかかる雲と林の上に見えるみね、という具合に、視線が次々と動いていく。これは、窓をフレームに見立て、その中にそれぞれの風景のパーツを配置して詠み込むのとは、異なる目の動きを要求する表現である。こうした例があることから、謝朓の「窓」表現の目的は、望郷の念などを詠むことに主眼があるのではなく、風景を窓というフレームに捉えて、静止画のように見せることにあったのだと考えられる。

では、韋応物詩の「窓」の表現には、どのようなものがあるのだろうか。

## 二 韋応物の「窓」表現

まず、韋応物の「窓」の表現を分類してみたい。韋応物詩には「窓」の使用例が二十一例見られる。ここでは、五類型に分けて考察をする。

### A 外と内を隔てるもの

……

3 此時深閨婦 此の時に深閨の婦あり

4 日照紗窗裏 日は照らす 紗窗の裏

5 娟娟雙青娥 娟娟として青娥なまこ双ひらび

6 微微啓玉齒 微微として玉齒啓く

…… (3)「擬古詩十二首」其二、卷一

「古詩十九首」其二『文選』卷二十九を踏まえた詩。

第4句は、日光が部屋の内を照らしている様子を言い、窓が採光の機能を担っていることがわかる。この詩には、閨室にある装飾品としての窓という要素も見える。

1 谷鳥時一轉 谷鳥時に一たびまへ轉り

2 田園春雨餘 田園春雨の余

3 光風動林早 光風林を動かすことつと早に

4 高窓照日初 高窓日を照らすの初め

…… (97)「春日郊居寄萬年吉少府中孚・

三原盧少府偉・夏侯校書審」卷二

第3句には、光を受けてきらめいている木々の葉が、風に吹かれて動いている様子が描かれ、窓を通して風が入ってきていることを思わせる。また、第4句には、高い位置にある窓から日光が降り注いでいることが詠われている。この詩における窓は、通気と採光の機能を持つものとして描かれる。

### B 室外から見るまど

……

7 絨書當夏時 絨書 夏時に当たるも

8 開絨時已度 絨を開くに時已にすて度る

9 簷雖已飜颺 簷雖已に飜颺として

10 荷露方蕭颺 荷露方に蕭颺たり

11 夢遠竹窗幽 夢みることに遠くして竹窗幽なり

12 行稀蘭徑合 行くこと稀にして蘭徑合す

13 舊居共南北 旧居 南北を共にし

14 往來只如昨 往來は只だただ昨のごとし

…… (253)「答李博士」卷五

故郷から離れ友人である李博士からの手紙に答えた詩。手紙を読んだから眠り、かつて住んでいた場所を夢に見た。竹が立ち並ぶ中に見える窓も、そこへ向かって伸び

る蘭の生えた小道も、故郷の家の様子である。これは、建築の一部として描かれている窓である。

### C 閑居の境地

……

9 高歌意氣在 高歌 意氣在り

10 貰酒貧居慣 貰酒 貧居慣れたり

11 時起北窓扉 時に北窓の扉に起く

12 豈將文墨閒 豈に文墨の間を將てせんや

(464 「野居」 卷八)

この詩には、窓から見える風景は詠われておらず、「北窓」という語が使われるのみである。これは、陶淵明「与子儼等疏」(卷七)に、

常言、「五六月中、北窓下臥、遇涼風暫至、自謂是羲皇上人」。(常に言ふ、「五六月中、北窓の下に臥し、涼風の暫かに至るに遇へば、自ら謂ふ是れ羲皇上の人なり」と。)

とあるのを踏まえる。赤井益久氏が白居易の詩について考察される中で「陶淵明の「北窓」は、季節と涼風との関わりで歌われており、象徴的意味合いはとくにない」と述べておられるように、「北窓」は陶淵明が詠った当初は、涼しさを表すために使われた語であった。韋応物詩

では、「文墨の間」、すなわち文官の集う政治の場に帰ろうとは思わないという隠遁宣言の中で「北窓」が使われている。韋応物詩の中では、「北窓」は、単に涼をとるためのアイテムとして描かれるのではなく、陶淵明の故事を思い起こさせる帰隱の象徴として使われている。このたぐいのものは、他に、

1 念子抱沈疾 子の沈疾を抱くを念ひ

2 霜露變滁城 霜露 滁城を變ず

3 獨此高窗下 独だ此の高窗の下にあり

4 自然無世情 自然として世情無し

(141 「覽褒子臥病一絶聊以題示」 卷三)

……

9 出去唯空屋 出去するは唯だ空屋

10 弊簣委窗閒 弊簣 窓間に委ぬ

11 何異林棲鳥 何ぞ林棲の鳥に異ならんや

12 戀此復來還 此を恋ひて復た來還せん

13 世榮斯獨已 世榮斯に独り已み

14 顏志亦何攀 顏志 亦た何ぞ攀ちん

15 唯當歲豐熟 唯だ歳の豐熟なるに当たり

16 閭里一歡顏 閭里 一たび歡顏せんことを

(456 「郊居言志」 卷八)

の二首が見える。いずれも、世の中の憂さや、榮達など

から離れた場の象徴として、窓を詠うものである。ただ、後者は最終聯に、豊作による村人の幸せを願う良吏としての姿が見え、官吏としての思いと、隠者としての思いが融合するようなものとなっている。

D 室内から外の眺めを見る

Cのグループと似ているものとして、隠遁への思いを詠うものがある。

- 1 群木晝陰静
- 2 北窗涼風多
- 3 閑居逾時節
- 4 夏雲已嵯峨
- 5 攀葉愛繁緑
- 6 縁澗弄驚波
- 7 豈爲論凤志
- 8 對此青山阿

群木 昼陰静かに  
北窗 涼風多し  
閑居 時節を逾え  
夏雲 已に嵯峨たり  
葉を攀りて繁緑を愛し  
澗に縁りて驚波を弄す  
豈に凤志を論ずることを為さんや  
此の青山の阿に對す

(431)「夏景園廬」(卷八)

陶淵明のいう北窓の持つ涼を招く要素を含みつつ、閑居の境地を描いている。Cの詩と異なるのは、明確に窓を通してみる風景が描かれていることである。窓の外に木蔭をつくる林や、入道雲が聳えている様子などが描かれている。涼しい林のように気持ち落ち着けてくれるような風景を描いたり、雲のように超俗の雰囲気をまと

うことばを使用したりすることで、読者に、より一層閑居の境地を実感させることができているように思われる。このたぐいの詩は他に四首見られる。

隠遁への思いを詠うものは謝朓の詩にも見えたが、これを一步進めて、吏隠の境地を詠うものが韋応物詩には見られる。まず、483「夏花明」(卷八)を見てみたい。

- 1 夏條緑已密
  - 2 朱萼綴明鮮
  - 3 炎炎日正午
  - 4 灼灼火俱燃
  - 5 翻風適自亂
  - 6 照水復成妍
  - 7 歸視窗間字
  - 8 熒煌滿眼前
- 夏条 緑已に密に  
朱萼 綴りて明鮮なり  
炎炎たり 日は正に午にして  
灼灼たり 火の俱に燃ゆるがごとし  
風に 翻りて適に自から乱れ  
水に照らされて復た妍を成す  
歸りて視る 窗間の字  
熒煌として眼前に満つ

第1句から第6句までは、緑の枝や葉に映える、夏の花の燃えるような赤色の美しさが述べられている。第七句では、その花を室内に戻ってから窓を通して見ている。

「窗間字」というのは、部屋の中から窓を通して見た花の並び方が文字のように見えたということであろう。ここから、庭の花を描いていることが想像できる。この詩では、自分の家の庭にある花の様子を細やかに描写し、庭の花の美しさに十分な満足を得ている詩人の思いが述べられている。滁州刺史期の詩である488「種葉」(卷八)

第9・10句に「陰類夕房斂、陽条夏花明。」（陰類 夕房<sup>きふ</sup>斂まり、陽条 夏花明らかなり。）とあり、この詩のタイトルと同じことばが使われているから、二つの詩の作詩時期は近いと考えられる。本詩も滁州刺史期の作と推定され、その花は役所の庭のものであると推察される。官吏として生きている場で、落ち着いた心境を得ているという状況は吏隠というにふさわしい。

同様のものに、494「郡齋移杉」（巻八）がある。

- 1 擢幹方數尺 擢幹<sup>まさ</sup>方に數尺
- 2 幽姿已蒼然 幽姿<sup>すて</sup>已に蒼然たり
- 3 結根西山寺 根を西山寺に結び
- 4 來植郡齋前 來たりて植う 郡齋の前
- 5 新含野露氣 新たに含む 野露の氣
- 6 稍靜高窗眠 稍や靜かなり 高窗の眠り
- 7 雖爲賞心遇 賞心の遇を為すと雖も
- 8 豈有巖中緣 豈に巖中の緣有らんや

寺院から郡齋の庭に移してきた杉の様子を描く。第6句の「高窗」は、楊炯「和蕭右丞省中暮望」（『全唐詩』卷五十）に「風響高窗度、流痕曲岸侵。」（風響 高窗に度り、流痕 曲岸を侵す）、祖詠「中峯居喜見苗發」（『全唐詩』卷一百三十一）に「暗澗泉聲小、荒岡樹影閒。高窗不可望、星月滿空山。」（暗澗 泉聲小にして、荒岡 樹影閑かなり。高窗 望むべからず、星月 空山に滿つ。）、

孟浩然「題終南翠微寺空上人房」（巻上）に「兩心相喜得、畢景共談笑。暝還高窗昏、時見遠山燒。」（兩心 相喜び得て、畢景 共に談笑す。暝に高窗の昏きに還るも、時に遠山の焼くるを見る。）とあるように、高いところにある窓から風が吹いてきたり、窓を通して星や月を眺めたり、遠くの風景を眺めたりするときに使われる。いずれも詩人自身がそうした様子を眺めているときに使う。

しかし、本詩では、「高窗の眠り」という、主語が詩人自身ともテーマとして詠われている杉ともとれる表現をする。ここは、杉をテーマに詠う中で、詩人自身と杉を重ね、詩人自身が眠りに入ろうとしているときに、高い位置の窓から見える杉も眠ったように静かになっていることを詠っているのだ、と考えたい。続く「賞心」ということばに象徴されるように、<sup>11</sup>あたかも心が通じ合っているかのように、詩人と同じタイミングで杉が同じように眠気を催していることに、窓を通して気付いたと表現しているのではなからうか。床に就いた状態で、室内から外の「賞心」の友である杉を眺める手段は窓を通すしかなく、必然的に窓を詠まなければならない。ここに、官舎の中で隠の象徴である植物を眺めよう、官舎の中でも植物と心を通わせてみたいという意識が見えてくる。その意識のもと、おだやかな心で静かな眠りを得ることができるのである。

この二首に共通するのは、庭という自分の住む空間にある植物に、非常に強い関心を抱き、窓を通して見える

それらの植物を細やかに描写することで、官舎に居ながらも詩人自身の気持ちを静かなものにし、満足感を得るようにしているということである。窓を通して見る植物は、韋応物にとつて心を安らげてくれる、かけがえのないものであったのだろう。

こうした心境の背景になりそうなものとして、窓を通して親しい人を使う作も韋応物詩には見られる。それが、故郷を思うものと、亡き妻を思う悼亡詩である。

故郷を思うものは、275「答王郎中」（巻五）である。

……

- |          |                |
|----------|----------------|
| 5 野曠歸雲盡  | 野曠くして帰雲尽き      |
| 6 天清曉露新  | 天清くして曉露新たなり    |
| 7 池荷涼已至  | 池荷 涼しきこと已に至り   |
| 8 窗梧落漸頻  | 窗梧 落つること漸く頻りなり |
| 9 風物殊京國  | 風物 京国に殊なり      |
| 10 邑里但荒榛 | 邑里 但だ荒榛たり      |
- ……

遠くの空を流れ、地平線のかなたへ消える雲、庭のはす、窓辺のあおぎりなどを見て、この風物が故郷である都長安とは異なっているということを述べる。「窗梧」の語は、韋応物以前には用例がなく、現存の文献上は、本詩が初出ということになる。「窗梧」は、窓から見えるあおぎりの意だと考えられるが、その場合、5ゝ7句の景

色を外で見て、あおぎりだけを室内に帰って見るというのは、自然な流れではないように思われる。したがって、ここに描かれている風景は窓を通して見たものだと思われるのがよい。窓を通してみる外の景色が故郷と違うことに思いを致し、室内にいる詩人の心に望郷の念が生じてきたという構成となっている。

悼亡詩については、三首ある。まずは、340「月夜」（巻六）である。

- |         |                |
|---------|----------------|
| 1 皓月流春城 | 皓月 春城に流れ       |
| 2 華露積芳草 | 華露 芳草に積もる      |
| 3 坐念綺窗空 | 坐るに念ふ 綺窗の空しきを  |
| 4 翻傷清景好 | 翻つて傷む 清景の好きに   |
| 5 清景終若斯 | 清景すら終に斯くのごとし   |
| 6 傷多人自老 | 傷むこと多く人自から老いたり |

「綺窗」は「古詩十九首」其五（『文選』巻二十九）に「交疏結綺牖、阿閣三重階。上有絃歌聲、音響一何悲。」（交疏 結綺の牖、阿閣 三重の階。上に絃歌の声有り、音響 一に何ぞ悲しき。）とあるように、女性がその側にいるイメージが付与されている語である。これを逆に用いて、本来ならば妻がいるはずの「綺窗」の側に妻がない（空）しいと詠い、妻の不在を悲しむ。この詩では、「綺窗」があるからこそ、妻の姿がないことに思いをいたすことになったのだから、窓が今は無き妻との思い

出を引き出すようになったと考えていることができる。

同様の表現は、474「秋夜」(巻八)<sup>12</sup>にも見える。

- |         |             |
|---------|-------------|
| 1 暗窗涼葉動 | 暗窗 涼葉動き     |
| 2 秋齋寢席單 | 秋齋 寢席単なり    |
| 3 憂人半夜起 | 憂人 半夜に起き    |
| 4 明月在林端 | 明月 林端に在り    |
| 5 一與清景遇 | 一たび清景と遇はば   |
| 6 每憶平生歡 | 毎に平生の歡を憶ふ   |
| 7 如何方惻愴 | 方に惻愴たるを如何せん |
| 8 披衣露更寒 | 衣を披きて露更に寒し  |

窓の外に風が吹いて葉が動き、単衣のふとんで寝ていた作者が夜中に起き上がって月明かりを見る、というものである。ここで使われる「暗窗」は、韋応物以前に用例がなく、この語も韋応物詩が初出ということになる。第4句に「明月」とあるので、「暗」とは言っても、おそらくほのかに木の影が見えていたのだと考えられる。そうした仄暗い光景を見せてくれる窓という意味で使われているのだと思われる。はっきりとは様子が見えない仄暗い家の外から、風が葉を動かして窓を通って入ってきたという表現は、同じく韋応物の悼亡詩である<sup>335</sup>「出還」(巻六)の第五・六句「悽悽動幽幔、寂寂驚寒吹。」(悽悽として幽幔動き、寂寂として寒吹に驚く。)という表現を思わせる。「出還」の表現からは、風によって妻の

部屋のとばりが動いたことで、まるで妻が室内に入ってきたかのように勘違いした様子が窺える。それと似た表現である「秋夜」の表現は、葉をゆらし、窓を通って詩人の所にやってきた風に妻の存在を感じ、彼女の不在を嘆いたことを述べていそうだ。

両者に共通するのは、潘岳の「悼亡詩三首」其二(『文選』巻二十三)を踏まえた表現をしているということである。潘岳の詩には、次のようにある。

- |         |             |
|---------|-------------|
| 1 皎皎窓中月 | 皎皎たり窓中の月    |
| 2 照我室南端 | 我が室の南端を照らす。 |

月明かりが室内を照らしたシーンから、全二十八句の詩が始まり、妻を思い出していく。潘岳のこの表現を受けて、韋応物は悼亡詩の表現を作り出したと考えられる。注意したいのは、潘岳の表現が夜に窓を通して月明かりがはいってきたことを述べ、詩の舞台を提示するのに止まるのに対し、韋応物の詩では、窓を通して妻の存在を感じようとしている様子が見られることである。韋応物詩は窓を通して妻を偲んでいたと詠む点に特徴があると言えるであろう。

同じく悼亡詩に<sup>351</sup>「同德精舍舊居傷懷」(巻六)がある。

- |         |         |
|---------|---------|
| 1 洛京十載別 | 洛京 十載の別 |
|---------|---------|

- 2 東林訪舊屏 東林 旧屏を訪ぬ
- 3 山河不可望 山河 望むべからず
- 4 存歿意多違 存歿 意違ふこと多し
- 5 時遷跡尚在 時は遷るも跡は尚ほ在り
- 6 同去獨來歸 同に去るも独り來歸す
- 7 還見窗中鵠 還つて見る 窗中の鵠の
- 8 日暮遶庭飛 日暮に庭を遶りて飛ぶを

これは、妻を悼んでいるときに寺の窓から庭をハトが飛んでいる様子が見えたというものである。鵠のハトについて、東晋・戴祚『西征記』『太平御覽』卷九百二十三に「祚至雍丘、始見鵠。大小如鳩、色似鸚鵡。戲時兩兩相對。」（祚 雍丘に至り、始めて鵠を見る。大小鳩のごとく、色は鸚鵡に似たり。戯るる時は兩兩相對す。）とあり、対になつて飛ぶ鳥であることがわかる。韋応物詩のハトもおそらく対になっているものであるう。それを見てかつて詩人自身と夫婦という形で対であつた妻を思っているのだらうと考えられる。先ほど挙げた二首と同様、やはり窓を通して見た風景によつて妻を思い出したのだと言えよう。

#### E 自己を内省する

これには、Dと同じく、窓から見える風景を描写しているものが二首、それ以外が一首ある。窓から風景を見ているものは、135「簡郡中諸生」（卷三）と、299「淮上遇

洛陽李主簿」（卷五）である。前者には、

- 3 此時聽夜雨 此の時 夜雨を聴き
- 4 孤燈照窗間 孤灯 窗間を照らす
- 5 藥園日蕪沒 藥園 日に蕪沒し
- 6 書帷長自閑 書帷 長へに自から閑かなり

……

とある。「窗間」は、のちに見る王維「送趙都督赴代州得青字」（卷二）のみに先例が見られる。また、灯と「窗」との組み合わせを探すと、たとえば、陸海「題龍門寺」『全唐詩』卷一百二十四に「窗燈林霽裏、聞磬水聲中。」（窗灯 林霽の裏、聞磬 水声の中。）とあるのや、王維「班婕妤三首」其一（卷三）に「玉窗螢影度、金殿人聲絕。秋夜守羅帷、孤燈耿不滅。」（玉窗 螢影度り、金殿 人声絶ゆ。秋夜 羅帷を守り、孤燈 耿として滅せず。）とあるものが見える。前者は、林にかかるもやの中にぼんやり見えるあかりを屋外から眺めており、「窗燈」は「窓の外から見える室内のともしび」の意だと考えられる。これは、韋応物が室内で灯を見ているのとは異なる。後者は、人の声のしない夜に、窓から外を流れていく螢の光を眺めつつ、空閨を守る班婕妤の姿が描かれる。班婕妤の部屋にある窓と灯を詠み、彼女の閨怨を詠うものである。窓とともしびが一首の詩の中に詠まれているが、それが

強力に結びつけられているわけではなく、ただそこにあるものとして描かれる。

これらに対して、韋応物は、室内と室外とを隔てつつも、ぽっかりと空いた空間によって外と中とを接続させる働きも持つ窓を灯が照らすのを室内で見ている様子を描く。ここには、閨怨詩のような鬱悶気もなく、外部から室内の様子をただ眺めるだけの他人事のような態度も見られない。ここにあるのは、ただ室外の雨音を注意深く聞き、室内のとしびを見えるという行為である。いずれも、静かに、落ち着いていなければできない。自らの心を落ち着け、心の波を立てないようにしていたからであろう、雨音しか聞こえない静かな庭の葉草畑を見ながら、自らの心境の象徴とも見えるところの静けさを感じている様子が描かれる。室外と室内の静寂がリンクしているような表現となっている。

後者には、

……

3 窗裏人將老 窗裏 人將に老いんとし

4 門前樹已秋 門前 樹已に秋なり

5 寒山獨過鴈 寒山に独り過ぐ鴈あり

6 暮雨遠來舟 暮雨に遠く來たる舟あり

……

とあり、門前の木が色づいてきたことや、山辺を飛ぶ雁、

雨の中、川をすすむ舟などを見、自身が老いてしまっていることを思う様子が描かれている。

「窗裏」は、たとえば張説「傷妓人董氏四首」其四『全唐詩』卷八十九)に「獨傷窗裏月、不見帳中人。」(独り傷む 窗裏の月あるも、帳中の人を見ざるを。)と窓から見える月があつても妓女がいないのでともに見ることはできないと嘆くものがある。こここの「窗裏」は、窓から月光が差し込む室内を言うと考えられる。また、崔国輔「秦女卷衣」(『全唐詩』卷一百一十九)に「雖入秦帝宮、不上秦帝牀。夜夜玉窗裏、與他卷衣裳。」(秦帝の宮に入ると雖も、秦帝の牀に上らず。夜夜玉窗の裏、他に与ふ卷衣裳。)と、帝がほかの女性を寵愛する部屋を「窗裏」という例も見られる。李百藥「詠螢火示情人」(『全唐詩』卷四十三)には「窗裏憐燈暗、階前畏月明。」(窗裏灯の暗きを憐れみ、階前月の明きを畏る。)と、螢のあかりが見えやすいよう室内の灯が暗い方がよいと述べるときに使われる例もある。総じて、室内を表す語として「窗裏」が使われる。その中で妓女や後宮の女性、螢など詩人とは違う人物や生き物について言及する例は散見するものの、本詩で自分自身が老いたと言うように自己の状況を省みる先例は見られない。室外の秋めいた木々と、室内の詩人自身の年齢とを一つの聯の中で重ね合わせているのは、韋応物が室外の冬に近づく様子を見て、室内にいる自分自身の老いと重ね合わせ、自らの境遇を見つめ直していることの表れと考えられる。謝朓詩のように

外の風景は外の風景として味わうという態度とは違う点が韋応物詩の特徴の一つと言えそうである。

これらと似た表現が、480「對殘燈」（卷八）に見える。

- 1 獨照碧窓久 独り碧窓を照らすこと久しく
- 2 欲隨寒燼滅 寒きに随ひて燼滅せんと欲す
- 3 幽人將遽眠 幽人 将に遽かに眠らんとし
- 4 解帶翻成結 帯を解きて翻つて結を成す

灯が窓を照らし、その火がつきようとしている中、隠者のような自分自身は寝ようとするが、却つて気持ち結びあはれてくると詠う。

「碧窓」は、李白「寄遠十一首」其八（『全唐詩』卷一百八十四）に「碧窓紛紛下落花、青樓寂寂空明月。」（碧窓紛紛として落花下り、青樓寂寂として明月空し。）と見え、また杜甫「江陵節度陽城郡王新樓成王請嚴侍禦判官賦七字句同作」（『全唐詩』卷二百三十二）に「碧窓宿霧濛濛溼、朱棋浮雲細細輕。」（碧窓宿霧濛濛として湿ひ、朱棋浮雲細細として輕し。）と見える。前者は、思ひ人が遠くに行つてしまつた女性の住む部屋の窓を言い、後者は陽城郡王の建てた新しい樓の美しさを形容するのに「碧窓」が使われる。一方、韋応物のこの詩では、女性のイメージや、窓の美しさを詠むわけではない。ここには、窓を照らす灯火を見たことを契機に、憂いが増していく様が描かれる。先にも見たように、窓を照らす灯

を見て、詩人自身の状況を省みる例はなく、韋応物詩の特徴と言うことができそうである。この詩は風景描写こそないが、灯火に照らされる窓を描写し、その窓によつて区切られた空間の中で自己を客観化して見つめ直しているという点では先の二首と共通する。室内で、しかも外の風景に感化されているのでなければ、「窓」を詠まなくともよさそうだ。それにもかかわらず、窓を詠み込むのは、ここまで見てきたような室外と通じる窓の機能を念頭に、韋応物が自己の外にある世界との関わりの中で、自己を見つめ直そうとしている気持ちの表れなのではないだろうか。

ここまでをまとめてみると、韋応物の「窓」の表現の特徴は以下のようになる。

- ・従来の「窓」の表現に見られた、隱遁への思いや、故郷への思いを表すものがあつた。
- ・隱遁への思いを表す表現は、俗世間を離れた場のみで詠われるのではなく、官舎でも詠われるものである。しかも、それは俗世間を離れる必要はないと詠む吏隱の思想が見えるものであつた。
- ・悼亡詩に、「窓」の表現を使つた。
- ・自己の内省をするための場を設定する小道具として、「窓」を使つた。

従来のものを受け継ぎつつ、「窓」を使って吏隱の思想

を詠むことや妻を思い出す悼亡詩に「窓」を詠むのは韋  
応物詩の特徴と考えられそうである。また、それとは別  
に、特に自己内省をする道具として、「窓」を使っている  
点は目を引く。室外の風景に触発されるものもあれば、  
室外の様子を書かずに自己内省をするものもあった。

ただ、いずれの場合でも共通することがある。それは、  
どれも韋応物自身の外にあるものとのつながりを意識し  
た表現であるということだ。吏隠であれば、「吏」として  
の韋応物の外にある「隠」の世界のイメージをもつ植物  
を、悼亡詩であれば、韋応物が生きているこの世とは違  
う世界に逝った妻を、自己内省であれば、韋応物という  
人間そのものの外にあるものを、それぞれ意識している。  
こうした窓の内側が象徴する自己の属性と、窓の外側が  
象徴する自己とは異なる属性のものが関わりを持つとい  
う状況、あるいは関わりを持たせようとしているという  
意識を、「窓」を使って表しているのだろう。  
これらを踏まえて次に王維、孟浩然の表現について考  
えたい。

### 三 王・孟の「窓」表現

まず、王維について見ていく。王維の詩にも、六朝以  
来の「窓」の表現が見られる。閨室を表すものとして、  
「晚春閨思」（巻四）がある。

7 向晚多愁思 晚くればに向んとして愁思多し  
8 閑窗桃李時 閑窗 桃李の時

これは、静かな室内で女性が物思いにふける様を描い  
たもので、閨怨詩の伝統を踏まえているものと言える。  
同じく室内を描写するにしても、閨室の様子ではなく、  
王の閑く宴席に使われたやしきの部屋を描写するものが  
ある。「從岐王夜讌衛家山池應教」（巻二）には、

5 積翠紗窗暗 積翠 紗窗暗く  
6 飛泉繡戶涼 飛泉 繡戶涼し

と、窓の外に緑が茂っていることで、室内が暗いことを  
表現する。これは、陶淵明の「北窓」にも見られた涼し  
さを得る「窓」の表現と似た側面も持っている。

また、「送趙都督赴代州得青字」（巻二）には、

7 豈學書生輩 豈に書生の輩の  
8 窗間老一經 窗間に一經に老ゆるを学ばんや

とあり、趙都督の武功をたたえるため、室内でずっと過  
ごすことを批判するのに「窓」という語を使っている。

このように室内を表すために使われる窓以外にも、王維の「窓」の表現には、室内外をつなぐ働きを描くものがある。「哭褚司馬」（巻七）には、

……

7 山川秋樹苦 山川 秋樹苦しむがごとく

8 窗戸夜泉哀 窗戸 夜泉哀しむがごとし

……

とあり、窓の外から木々や滝が褚司馬の死を悲しんでいるかのような音が聞こえると言う。外と中を繋ぎ、音を招き入れるという窓の機能を詠いつつ、自身の心境を風景に投影している。

また、故郷を思うものもある。「雜詩三首」其二（巻七）には、

1 君自故郷來 君 故郷より来たる

2 應知故郷事 応に故郷の事を知るべし

3 來日綺窗前 来たる日 綺窗の前に

4 寒梅著花未 寒梅は花を著けしや未だしや

とあり、故郷にある家の梅を気にする様子が描かれる。

これは、故郷にあり、いま眼前にない家の窓を描写するという点で、さきほど韋応物詩に見られた夢にみた故郷の家の様子を描くものと通じる。

王維の詩には、さらに隱遁のイメージを持たせたものが見られる。この類が王維の窓の詩では最も多く、七首が挙げられる。次に詩題を列挙する。

◎寺院で詠まれたもの

「寄崇梵僧」（巻二）、「登辨覺寺」（巻二）

「春日上方即事」（巻七）、「千塔主人」（巻一）

◎仙境のイメージを持たせているもの

「敕借岐王九成宮避暑應教」（巻一）

「奉和聖製幸玉真公主山莊因題石壁十韻之作應制」（巻三）

◎溪谷や田園で詠まれたもの

「東溪玩月」（巻二）、「田園樂七首」其二（巻五）

「戲贈張五弟諱三首」其一（巻二）、「山茱萸」（巻五）

一覽してわかるのは、寺院で詠まれたもの、政界をはなれた溪谷や田園で詠まれたものがあり、韋応物のように官舎で隱遁のイメージを持った窓や、自己内省を促す場を設定するための窓を詠うことはない。

詩題から、詩の雰囲気が分からないものとして、「敕借岐王九成宮避暑應教」（巻一）、「奉和聖製幸玉真公主山莊因題石壁十韻之作應制」（巻三）、「戲贈張五弟諱三首」其一（巻二）がある。一つ目・二つ目の詩にはそれぞれ、

1 帝子遠辭丹鳳闕 帝子 遠く丹鳳闕を辞し

2 天書遙借翠微宮 天書 遥かに翠微宮より借る

3 隔窗雲霧生衣上 窗を隔てて雲霧は衣上に生じ

4 卷幔山泉入鏡中 幔を巻きて山泉は鏡中に入る

.....

7 洞中開日月 洞中 日月を開き

8 窗裏發雲霞 窗裏 雲霞を發す

9 庭養冲天鶴 庭には冲天の鶴を養ひ

10 溪留上漢查 溪には上漢の查を留む

.....

とあり、いづれも避暑地を仙界のように見立てたものである。窓は仙界のような風景を見せるための道具として使われる。

また、「戲贈張五弟諱三首」其一には、

.....

1 吾弟東山時 吾が弟 東山にありし時

2 心尚一何遠 心は尚ほ一に何ぞ遠き

3 日高猶自臥 日高くして猶ほ自から臥せ

4 鐘動始能飯 鐘動きて始めて能く飯す

.....

11 窗外鳥聲閑 窗外 鳥声閑かに

12 階前虎心善 階前 虎心善し

.....

とあり、隱者のような生活をしている弟の家の窓を詠む。この詩の窓も山中での隱遁を象徴するものと考えられる。また、窓から見える景色を描く「山茱萸」の詩には、

1 朱實山下開 朱実 山下に開き

2 清香寒更發 清香 寒きに更に發す

3 幸與叢桂花 幸ひに叢桂花と

4 窗前向秋月 窗前に秋月に向かふ

とある。詩の内容として植物や月を目にする喜びが詠まれていること、また、『輞川集』に「茱萸<sup>あざみ</sup>」の詩があり、おそらくそれと同時期の作と推定されることから、これも隱遁のイメージが付与されたものと考えられる。

以上から、王維の「窓」の表現をまとめると、以下のようになる。

・従来のものを踏襲する。閨室を含む、室内の描写に「窓」を用いることが多い。  
・隱遁のイメージを表すものが多い。大部分は、寺院や僧にまつわる詩に使われる窓の表現に見られるが、一方で仙境のイメージを持たせるものがあることが特徴的である。

次に、孟浩然の「窓」について検討する。孟浩然の「窓」には、隠遁のイメージが付与されているものが多い。「晚春臥病寄張八」（巻中）には、

- 1 南陌春將晚 南陌 春將に晩れんとするに  
2 北窗猶臥病 北窗に猶ほ病ひに臥す

とあり、病と称して隠遁していることを陶淵明の用語でもある「北窓」を使つて表現する。孟浩然には他に六首、このたぐいのものが見られる。

また、閨室のイメージを詠うものもある。「寒夜」（宋本集外）には、

- 1 閨夕綺窗閉 閨夕 綺窗閉ぢ  
2 佳人罷縫衣 佳人 衣を縫ふを罷む

とあり、寒い夜に室内にいる女性の姿を描く。

孟浩然の「窓」は、以上のタイプのみで、六朝までの伝統をそのまま引き継いでいる。

以上から、王・孟には見えない韋応物詩の「窓」の表現の特徴は①吏隱の思想が詠われる、②悼亡詩に「窓」を使う、③自己内省の場を設定するという三点に集約されそうだ。

①については、<sup>483</sup>「夏花明」も<sup>494</sup>「郡齋移杉」も、ともに滁州刺史期の作である。前稿で、韋応物が滁州刺史期に寂しさを埋めるために、植物に友であることを求めたことを指摘した。<sup>16</sup>「窓」を通して植物を眺めながら、隠遁の境地に心をやるのも、こうした意識の反映であろう。

②についても、①と同様に、妻の不在による寂しさを埋めるために、「窓」の外の植物や動物などを見て、心を慰めていたと考えられる。

いずれも、韋応物の人恋しさが表れた表現である。

③については、謝朓、王維、孟浩然のいずれの詩にも見られない。窓から見える外界の風景により、自らの老い、憂い、閑居の情などが引き立てられ、それにより自己を見つめ直すことになったのだろう。また、外の風景を見ずとも、「窓」を詠み込むことで外界とのつながりを意識した表現もあった。完全に自己の中に閉じこもるのではなく、外との関わりの中で自己内省をする態度が韋応物にはあったと考えられるだろう。

#### 四 白居易詩への展開

最後に、白居易への展開を考えたい。

赤井益久氏は、白居易詩には風景を見て内面を見つめるものがあると述べる。<sup>97</sup>その内向の視点は、錢起など先行する詩人の作品に見られるという。赤井氏は錢起「藍田溪雜詠二十二首」窗裏山（『全唐詩』巻二百三十九）の「遠岫見如近、千里一窗裏。坐來石上雲、乍謂壺中起。」

(遠岫 見れば近きがごとく、千里 一窗の裏。坐るに來たる石上の雲、乍たちま壺中より起こるかと謂おもふ。)を引き、

後半の窓中に見た景色は、「窓」を額縁に見立てた謝朓の表現をさらにひとひねりして、限られた空間でありながらそれが「壺中」より湧き立ったという発想により、その空間は作者自身を包み込みながら外界の空間とひとつづきになり、窓の内側を小宇宙へと反転させている。

と、壺中天の思想が背景にあると指摘される。赤井氏は、白居易が錢起の詩などに見られる発想を受け継ぎながら、次のような境地に達するとまとめておられる。

「大」を「小」に反転させ、そこに《退隱》の本質を認めようとする自覚と自信は、「大」のなかに没入し韜晦する従前の価値から、より自らの生を自律的に処し、改めて全体を捉えようとする変化の表れであろう。それは《退隱》の場としての自然の風景——すなわち自己の世界観をいかにとらえ、表すかに端的に看取されるのである。

ここで赤井氏が述べている、白居易の姿勢に注目してみたい。白居易の境地に近いものは、第三節までに見てきた韋応物の「窓」の表現に見られた自己内省の発想に

見える。韋応物は、「窓」によって外界と仕切られた空間で自己の憂いや閑居の思いをふり返っていたが、それは室外にある風景などによって触発された行為である。しかも、その表現を追うと、<sup>135</sup>「簡郡中諸生」(卷三)にあるように、室外にある藥草園と室内の自分自身の状況を同調させたり、<sup>299</sup>「淮上遇洛陽李主簿」に見えるような、室外の隱と室内の官とを融合させていこうとしたりするものが見られた。窓を境として官と隱とを統合していくような表現や、外の風景が窓を通して詩人の目に映り、そのことで詩人が自己を見つめ直しているという表現は、少なくとも王維、孟浩然ら韋応物に先行する自然詩人には見られない。韋応物の「窓」表現には、壺中天の思想の影響こそ見られないが、吏と隱の融合が見える。吏隱という処世の在り方に関して、白居易の思想に通ずるものがあつたと言ふことができよう。こうした自分が身を置く官吏の世界とは性質の異なる隱の世界との接触を、「窓」を通して持ちつつ、閑居の生活を求め、自己を深く見つめ直そうとする態度こそが、おそらく白居易が手本としたいと憧れた<sup>136</sup>韋応物の姿の一つであつたのだろう。

#### おわりに

本稿では、韋応物詩の「窓」の表現について考察してきた。その中で、吏隱の思想が反映しているものがあることや、韋応物の人恋しさが原因と思われる表現が見ら

れることがわかった。また、窓を利用し、自己内省をはかる場を設定する詩も見られた。

なぜ韋応物は「窓」を通して自己内省をはかるような表現をしたのだろうか。それは韋応物が心を許せる友人や妻のような親しい人を強く求めていたことと関わりがあるように思われる。自己内省の詩のうち、135「簡郡中諸生」(卷三)と、299「淮上遇洛陽李主簿」(卷五)は、韋応物が滁州刺史であったころのものである。480「對殘燈」(卷八)は、作詩年代をつかむ手がかりが少ないが、おそらく前二者と同じ頃の作ではないかと思われる。前稿で、韋応物が友人を強く求めた時期が滁州刺史期であったという結論を得たが、自己内省もこれと軌を同じくして詠まれるようになっていく。おそらく、中央にいたころは近くに様々な友人がいて、交遊をしていたことで考えることが少なかった、自身の孤独や寂しさを強く感じるようになったのがこの時期ではないかと推測される。彼の感じた孤独感が、韋応物の文学に新たな表現をもたらし、白居易の「窓」の表現へと繋がっていったことを考えると、韋応物の滁州刺史期の詩は、文学史的にも非常に重要な意味をもつていそうである。これについては、稿を改めて論じてみたい。

## 注

(1)「幽」や「清」が多用されることについて、大野實之助「王右丞と韋蘇州」(『早稲田大学国文学研究』第十九輯、一九五

九年)、深澤一幸「韋応物の抒情詩」(『颯風』第七号、一九七五年)赤井益久「韋応物詩論―屏居の位相を中心に―」(『中唐詩壇の研究』創文社、二〇〇四年)に指摘があり、筆者も「韋応物詩に見られる吏隠表現―「幽」字の使われ方を中心―」(『中国学研究論集』第十六号、二〇〇六年)で述べた。

(2) 拙稿「韋応物の自然詩について―「賞」字の使われ方―」(『中国中世文学研究』第五十一号、二〇〇七年)。

(3) 拙稿「韋応物の植物詩―「花意」を手がかりにして―」(『中国文史論叢』第八号、二〇一二年)。

(4) 本稿での底本は以下の通りである。韋応物詩は四部叢刊本『韋江州集』、謝朓詩は曹融南校注『謝宣城集校注』(上海古籍出版社、一九九一年)王維詩は陳鉄民校注『王維集校注』(中華書局、一九九七年)、孟浩然詩は修培基箋注『孟浩然詩集箋注』(上海古籍出版社、二〇〇〇年)。なお、韋応物詩の番号は、赤井益久「韋応物伝記伝本攷」(『国学院雑誌』第七十九卷第十号、一九七八年)によった。

(5) 石碩「謝朓詩における「窓」の風景」(『中國文學研究』第三十六期、早稲田大学中国文学会、二〇一〇年十二月)。

(6) 森野繁夫『謝宣城詩集』(白帝社、一九九一年)。

(7) 他に、他者が隠遁する家の窓を詠った<sup>433</sup>「題從姪成緒西林精舍書齋」(卷七)もあるが、韋応物自身の思想が込められているとは言えないので、考察対象から外した。

(8) 赤井益久「白詩風景考―「竹窓」と「小池」を中心として―」(『中唐詩壇の研究』創文社、二〇〇四年。初出「白詩風景小考」(『國學院大學大学院紀要―文学研究科』第十二輯、

一九八一年)。

(9) 29 「移疾、會詩客元生與釋子法朗。因貽諸祠曹」(卷一)、

91 「西郊養疾、聞暢校書有新什見贈、久佇不至。先寄此詩」

(卷二)、417 「道晏寺主院」(卷七)、453 「燕居即事」(卷八)。

(10) 確認した限り、全ての版本で「窗間字」となっていた。

ただ、ここは「字」ではなく、「字」の誤りだとも考えられる。その場合、「窓の中に見える空間」という意味になる。

(11) 前掲注(2) 拙稿参照。

(12) 474 「秋夜」は従来悼亡詩とされてこなかった。近年、胡

旭『悼亡詩史』(東方出版中心、二〇一〇年)、黒田真美子「韋  
応物悼亡詩論 序説―十九首構成への懷疑―」、『お茶の水女  
子大学中国文学会報』30、二〇一一年)が、十九首以外に十

数首の詩が悼亡詩に認定できるという見解を出した。474 「秋  
夜」は、両氏ともに悼亡詩であると認めている。

(13) 陳鉄民氏は、『唐文粹』が王昌齡の作とし、『全唐詩』が

王維・王昌齡のどちらの集にも載せることを踏まえ、「此詩  
之著作權屬誰人、殊難確斷、今姑作王維詩收入集中。」と言  
う。本稿でも、仮に王維の作として論を進める。

(14) 陳氏校注による。

(15) 他に、「題終南翠微寺空上人房」(卷上)、「春晚題永上人  
南亭」(卷上)、「同王九題就師山房」(卷中)、「過融上人蘭若」

(卷下)、「歲晚歸南山」(卷下)、「仲夏歸南園寄京邑舊遊」(卷  
下)。

(16) 前掲注(3) 拙稿。

(17) 前掲注(8) 赤井氏論文。以下の赤井氏の論の引用は、

全てこれによる。

(18) 白居易の2916「吳郡詩石記」(卷五十九)に「貞元初、韋

應物爲蘇州牧、房孺復爲杭州牧。……時予始年十四五、旅二

郡。以幼賤不得與遊宴、尤覺其才調高而郡守尊。以當時心言、

異日蘇・杭苟獲一郡足矣。」(貞元の初め、韋應物・蘇州の牧

と爲り、房孺復・杭州の牧と爲る。……時に予始めて年十四

五にして、二郡に旅す。幼賤を以て遊宴に与るを得ざるも、

尤も其の才調高くして郡守の尊きを覺ゆ。當時の心を以て言

ふ、異日に蘇・杭苟くも一郡を獲れば足れりと。)とあり、

韋應物や房孺復のようになりたいと思っていた様子が窺え  
る。